

魔女という存在は悪なのか ～ 『グリム童話集』より「ラプンツェル」(KHM12) から見える親子のありかた～

10K016 伊藤 真理

はじめに

民話や昔話において、「魔女」というものは、悪の象徴として描かれている。それは、グリム童話においても同様であり、人間を魔法で動物に変えたり、人を食べてしまうなど、恐ろしいイメージとして登場することが非常に多い。しかし、KHM12の「野ぢしゃ（ラプンツェル）」に登場する魔法使いの女に関しては、魔法を使い、人を陥れるような残虐な描写はない。むしろ、ラプンツェルから名前と呼ばれていること、ラプンツェルにきちんと幸せな暮らしをさせていたことが書かれており、二人の関係は良好であったことが読み取れる。また、12歳という異性に関心を持ち始める頃にラプンツェルを塔に閉じ込め、婚前交渉を回避させるなど、市民モラルを守ろうとしている。

なぜ、グリム童話の中のこの物語だけ、このような異質な魔女が描かれているのだろうか。本レポートでは、まず、「ラプンツェル」における魔女と比較するために、グリム童話に登場する一般的な魔女の役割について述べ、次に、初版の「ラプンツェル」を読み、魔女に視点を絞り相違点や共通点を出し、決定版との違いを考察する。そして、全体を通して、ラプンツェルにとって、魔法使いの女とはどのような存在であったか、考えていく。

1. グリム童話の中の魔女

グリム童話において、「魔女」と呼ばれるものは、「Hexe」及び「Zauberin」という単語で表される。これらの特性は、本来は重なり合う部分もあるが、グリム童話の原文でははっきりと分けられている。ここでは、この二つの単語がどのように区別されているか述べてみたい。

1-1 Hexe

今日、ドイツ語のHexeの訳語には、多くの場合「魔女」という語をあてている。そして、ドイツ民話における魔女という存在は、ロシア民話における鬼や悪漢、フランスの人食い鬼と同様に残忍である。⁽¹⁾つまり、ドイツの民話において、残忍さを代表する存在は魔女であり、こうした印象はグリム童話によるところが大きい。

グリム童話の中でHexeが登場するもので有名な話が、KHM15「ヘンゼルとグレーテル」である。この物語に出てくる魔女は、おいしいごちそうを出し、一見親切に接するふりをして、子どもたちを食べる計画をたてる。⁽²⁾この、人を殺して食べようとするのは、Hexeの最大の特徴である。⁽³⁾

また、もう一つ目立った特徴として挙げられるのが、継母が魔女とされている話が多いことである。有名なもので、KHM11「兄と妹」やKHM53「雪白姫」などがそれに該当する。しかし、この継母＝魔女

という図式は初稿にはなく、版を重ねるごとに書き換えられていった。この背景には、愛と思いやりに満ちた当時の理想的家庭像に、子どもを虐待したり捨てたりする母親、子どもに嫉妬し、憎んで殺そうとする悪い母親はそぐわなかったからである。つまり、悪い継母をふつうの人間とはもともと違う魔女にすることによって、家庭内の矛盾や葛藤を、別世界のものにしようとしたのである。⁽⁴⁾

悪を体現する存在であるHexeは、その悪業への罰として、火刑をはじめとする極刑に処せられる場合が多い。Hexeが処刑されるかどうかは、殺害の意図の有無による。つまり、殺しを意図して魔術を使う場合や、害を加えた場合は必ず罰せられている。次に述べるZauberinは罰を受けるケースが全くないため、処罰されるのはHexeの特徴といえる。⁽⁵⁾

1-2 Zauberin

Zauberinは多くの場合、「魔法使いの女」と訳されている。「ラプンツェル」に登場するのが、このZauberinである。グリム童話におけるHexeが「年をとって、悪い」という性格づけが強調されているのに対し、Zauberinの特徴として、そのような性格づけはほとんどされていない。また、前述したとおり、Zauberinとして登場する魔法使いの女は、害を与える目的で魔術を使いこなすものの、殺害の意志は誰ひとり持っていない。つまり、Zauberinの中に処罰された者はいないのである。すなわち、総合的にみて、グリム童話においてZauberinはHexeほど悪者にされていないとすることができる。⁽⁶⁾

しかし、「ラプンツェル」に登場するZauberinは一度も魔法を使っていないうえ、子どもを我が子のようにかわいがるなど、他の話のZauberinとは異なる。これは、なぜなのだろうか。

2. 初版との比較

初版と決定版を比較すると変更点はいくつか挙げられるが、ここで注目すべき点は、魔法使いの女が、初版では別の存在として登場することである。決定版におけるZauberinは、「世間じゅうの人からこわがられている魔法つかいの女」と表現されている。⁽⁷⁾ それに対し、初版では「妖精」という一言で呼ばれている。⁽⁸⁾

また、決定版において、亭主が二度目に魔法使いの女の家で野ぢしゃを盗みに入った際に、魔法使いの女は「こっぴどい目にあわせてくれる」といった言葉で亭主を脅す。⁽⁹⁾ この描写から、魔法使いの女がいかにか腹をたてているかわかる。しかし、初版では、実際に妖精が怒って発した言葉は書かれておらず、「盗みを働こうとしたことをひどく怒りました」という説明で済まされている。⁽¹⁰⁾ 決定版に比べると、妖精が心底腹を立てているというニュアンスが伝わってこない。

決定版で生じた、魔法使いの女が魔術を使わないという違和感は、初版の「妖精」を、そのまま「魔法使いの女」へと変更したからなのである。この変更の理由は、妖精はドイツ本来のものではないという判断から、グリム兄弟により、ドイツ的な性格を持つ魔法使いの女に変えられたと考えられる。

3. Fee (妖精) からZauberinへ

では、なぜ初版において妖精が登場するのか。もともと「ラプンツェル」は、18世紀のフリードリヒ・シュルツ (Friedrich Schulz) の作品をグリムが再話したものである。彼らはこの小説を、自国の民話を元にした再話文学だと考えていた。そして、兄のヤーコプが翻案したものが初版に収められ、弟のヴィルヘルムがこれに性的描写を削除する修正を加えていき、現在私たちの知る決定版の「ラプンツェル」

になった。⁽¹¹⁾

しかし、シュルツの作品は、ドイツの民話伝承を元にしたものではなく、1698年にフランスのド・ラ・フォルス（de la Force）が書いた『ペルシエット』を参考にしたものだったのである。シュルツとフォルスの作品では、いずれも妖精だったのを受け継ぎ、初版ではグリムも妖精としていたのである。しかし、第2版以降、ドイツの話という色彩を強めるために、グリム兄弟はフランス起源のFeeからドイツ語のZauberinに変えてしまったのである。⁽¹²⁾

こうした事情により、グリム童話の「ラプンツェル」のZauberinは、他のそれと性質が違うのである。妖精は、フランス語ではfeeであるが、その語源はラテン語のfatumであり、信託、運命、不幸、運命の女神、悪魔を意味する。⁽¹³⁾ 神託から悪魔までも意味している妖精は、善悪両面を併せ持った存在だと言える。グリム童話の決定版においても、魔法使いの女は、自分の庭の野ぢしゃを盗んだ罰として、生まれたばかりの子どもをとりあげる恐ろしい一面と、子どもをかわいがって育てる優しい側面の両面をもった存在である。このような、善悪両面を有している魔法を使う者の存在は、グリム童話において例外的存在である。⁽¹⁴⁾

4. フランス民話「ペルシエット」

「野ぢしゃ（ラプンツェル）」の中のラプンツェルと魔法使いの女の関係について考える際に、この話のもととなっているフランスの民話「ペルシエット」が参考になる。この話の中に出てくる妖精と、その妖精によって名付けられたペルシエットという少女は、非常に良い関係を築いている。その理由として、ペルシエットは妖精のことを「かあさん」と呼んでいる、一度は王子と共に塔から逃げようと外へ出るが、自らの意志で妖精のもとへ戻っている、ということが挙げられる。そして、最終的には、妖精はペルシエットを塔ではなく自分の住まいへ連れて行き、非常に金持ちの王子と結婚させる。⁽¹⁵⁾

グリム童話との最大の相違点は、「ペルシエット」は、最終的に妖精の望むとおりの結末を迎えたというところにある。これは、二人の関係が、血縁関係にある親子並みの信頼関係で結ばれていることを示唆している。一方、グリム童話では、ラプンツェルは魔法使いの女が最も恐れていた方法で、魔法使いの女を裏切ってしまう。その裏切りに対する魔法使いの女のした行為は非常に残酷なものであった。このことを、視点を変えて見ると、裏切られたことに対する仕打ちの酷さは、ラプンツェルへの愛情の大きさに比例すると考えていいだろう。

このような点から、「ペルシエット」と「ラプンツェル」は、結末こそ違うものの、育ての親と子どもの関係はとても良好であり、魔法使いの女及び妖精は、母性愛に満ち溢れていたと考えられる。

おわりに

これまで決定版と初版の「ラプンツェル」、フランス民話の「ペルシエット」を比較してきたが、全てに共通して言えることは、産みの母親が子どもを手渡して以来、一度も登場していない点である。それに対し、ウォルト・ディズニー（Walt Disney）の、「塔の上のラプンツェル」という作品でラプンツェルは、産みの母親と再会を果たす。つまり、ディズニーの作品でのラプンツェルにとってのハッピーエンドは、産みの親の元へ戻ることだった。この、育ての母親をいとも簡単に拒絶する描写には、疑問が残る。

本レポートを書くにあたり、魔法使いの女に焦点を当てて比較を重ねた結果、「ラプンツェル」から、親子のありかたについて考えるきっかけを得ることができた。「ラプンツェル」という話は、「人間にとっ

て大切なのは、産みの親なのか育ての親なのか」という問題提起をしていると、私は考える。

註

- (1) マリア・タタール著（鈴木晶ほか訳）『グリム童話 その隠されたメッセージ』新曜社、1992年、289ページ。
- (2) 金田鬼一訳『完訳 グリム童話集(一)』岩波書店、2010年、165ページ。
- (3) 奈倉洋子『グリムにおける魔女とユダヤ人—メルヒェン・伝説・神話』鳥影社、2008年、42ページ。
- (4) 同上、41-42ページ。
- (5) 同上、49-50ページ。
- (6) 同上、58ページ。
- (7) 金田訳、前掲書、133ページ。
- (8) 吉原高志、吉原素子訳『ベスト・セレクション 初版グリム童話集』白水社、1998年、34ページ。
- (9) 金田訳、前掲書、134ページ。
- (10) 吉原訳、前掲書、36ページ。
- (11) ラブンツェル
<http://suwa3.web.fc2.com/enkan/minwa/jack/09.html>（2013年1月31日取得）。
- (12) 奈倉、前掲書、59-60ページ。
- (13) トマス・カイトリー（市場泰男訳）『妖精の誕生』社会思想社、1989年、20-21ページ。
- (14) 奈倉、前掲書、62ページ。
- (15) 新倉朗子編『フランス民話集』岩波書店、2004年、64-68ページ。

(指導教員 桑原ヒサ子)